

複合施設で生活する高齢者における子どもとの交流の意味

(世代間交流／複合施設／高齢者)

福岡理英・原 祥子・小野光美

Important Interaction With Children for Older Adults Living in the Mixed Care House

(intergenerational interaction / mixed care house / elderly)

Rie FUKUOKA, Sachiko HARA and Mitsumi ONO

Abstract The objective of the present study is to clarify how important it is for older adults living in the mixed care house to have interaction with children. The study participants are a total of 10 elderly persons including three males and seven females living in the mixed care house. The semi-structured interview method was used to collect data. The data obtained were subjected to qualitative and posteriori analyses. The analytical results showed that, for the older adults living in the mixed care house, interaction with children was important because this experience helped them recognize ‘comfortable living environment,’ ‘enhanced energy to live,’ ‘improvement of self-esteem’ and ‘look back upon individual life.’ Thus, the interaction with children itself provides ‘comfortable living environment’ for these older adults. This environment promotes ‘enhancement of energy to live’ and ‘improvement of self-esteem.’ Then, they can find ‘look back upon individual life.’ The results suggested that these older adults could promote integrity, a development task in old age, through accumulated experiences of daily interaction with children attending the nursery in the mixed care house.

【要旨】本研究の目的は、複合施設に入居する高齢者にとっての子どもと交流する意味を導き出すことである。研究協力者は、複合施設のケアハウスに入居する男性3名、女性7名の10名であった。半構成的面接法によりデータ収集を行い、質的帰納的に分析した。その結果、複合施設に入居する高齢者の子どもとの交流の意味として、【心地よい居場所】【生きる力の高まり】【自尊心の向上】【人生を顧みる】が見出された。複合施設に入居する高齢者にとって子どもとの交流は、そのものが【心地よい居場所】であり、その中で高齢者の【生きる力の高まり】と【自尊心の向上】がもたらされ、【人生を顧みる】につながっていることが示された。このことから、高齢者にとって複合施設内の保育所に通う子どもとの日常的な交流の積み重ねは、老年期の発達課題である統合を促進する要素であることが示唆された。

I. 緒 言

平均寿命が男性84.19歳、女性90.93歳¹⁾と長寿命となったわが国では、高齢者となつてからの長い時間を

どのように過ごすかは大きな課題である。同時に、総人口に占める65歳以上の人口の割合を示す高齢化率は26.0%に達し、今後も増加が続き、2060年には39.9%に達すると推計されている¹⁾。社会全体の中で大きな割合を占めている高齢者層の健康状態や社会参加は、社会保障費、文化の伝承等に大きな影響を与えると考える。

高齢者の活性化の取り組みとして、高齢者の生きがいや自己実現を図るための居場所や出番作り、また高齢者の社会的な孤立を防止するための地域づくりとして、高齢者と子どもの交流が推進されている²⁾。高齢者

は人との関わりによって生まれる思いを大切にしたり、心の支えにしたりすること、孤独ではない喜びを感じる事等が報告されており³⁾、高齢者の生活は、人との関わりが重要な意味をもっていると考えられる。高齢者と子どもの交流は、戦後の家族形態の変容、家族機能の変化によって生じた高齢者の社会的孤立などの弊害を解消するために、1960年代より各地で意図的に取り組まれ始め⁴⁾、今後、高齢化が進み高齢者の単独世帯数が増加する見通しである¹⁾ことから、高齢者支援の取り組みの一つとして子どもとの交流の意義がますます高まると予想される。

高齢者と子どもの交流は、様々な健康レベルの高齢者と、幼児以上の子どもを対象とし、高齢者施設や学校、地域をフィールドにして行われている^{5),6)}。先行研究では、交流の効果として、QOL向上⁷⁾や地域共生意識向上⁸⁾、高齢者の活動参加意欲が高まり身体的健康の維持・向上につながる、感情や記憶が刺激され精神的健康の向上がみられる⁹⁾などが報告されている。高齢者が生活する施設には、複合施設と呼ばれる、保育所などの子ども用の施設とケアハウスや特別養護老人ホームなど的高齢者用の施設が合築・併設されたものがある。複合施設の中には、保育所の遊戯室や園庭が見える場所に高齢者のリハビリテーション室や食堂を配置する、施設の境界部に設置される扉を格子にする等、空間の利用や配置を工夫し、特別な機会を設ける意図的な交流だけでなく、高齢者と子どもがお互いの気配を感じながらの日常的な関わりができるようにしているところも存在する。複合施設における子どもとの交流が高齢者にもたらす効果として、日常的に繰り返される交流により家族のような存在となり高齢者が必要とされていると感じ存在価値を確認できる、子どもの存在が癒しや刺激になる、施設の職員から与えられるケアと子どもに与えるケアのバランスがとれるなどが報告されている^{10),11)}。

しかし、これらの報告はいずれも観察調査、スタッフからの聞き取り調査、質問紙調査によるものであり、高齢者自身が子どもとの交流をどのように感じ、意味づけているのかを明らかにした研究は見当たらない。そこで本研究では、子どもとの日常的な交流がみられる複合施設で生活する高齢者を対象とし、子どもとの交流の意味を導き出すことを目的とする。高齢者にとっての子どもとの交流の意味を見出すことは、高齢者自身が捉える子どもとの交流を踏まえた高齢者に寄り添った世代間交流、高齢者の力を引き出す支援の検討につながり、高齢者が自分らしく暮らすための一助になると考える。

II. 用語の定義

本研究における「複合施設」とは、同敷地内にケアハウスと保育所・学童保育施設が存在する施設とする。「子ども」とは、複合施設である保育所に通所している生後8週～6歳、保育所を卒所後学童保育施設に通所している6歳～10歳とする。「交流」とは、ケアハウスに入居している高齢者とケアハウスに隣接する保育所・学童保育施設に通所している子どもが、時間と場を共有し、バーバル・ノンバーバルなコミュニケーションを図ることとする。「意味」とは、高齢者自身が捉えている子どもとの交流の価値とする。

III. 研究方法

1. 研究フィールド

本研究のフィールドは、島根県のY地域（高齢化率26.0%）のZ複合施設である。Z複合施設は、ケアハウスと保育所と学童保育施設が併設されている。保育所には乳幼児が、学童保育施設には学童児が通っている。Z複合施設は、子ども世代、親世代、祖父母世代の人たちが世代を超えて触れ合い、労り合い、育ち合えることを目指している。ケアハウスの入居者数は50名、保育所は200名、学童保育施設は70名である。交流は、毎月の誕生日会や月に1～3回の行事（よもぎ摘み、笹巻き作り、サツマイモ植え、夏祭り、合同運動会等）を通して行なわれ、1回の交流は30分～3時間である。その他には、ケアハウスの窓から子どもたちが遊ぶ様子を見る、外に出ると出会うなどの日常的な交流もみられる。したがって、保育所から学童保育施設まで継続した交流がみられる特徴がある。

2. 対象者

本研究の対象者は、Z複合施設のケアハウスに入居しており、子どもたちとの交流会に参加している、要介護度が非該当（自立）もしくは要支援であり、認知に障害がなく口頭面接が可能な65歳以上の高齢者10名である。

3. データ収集方法

データ収集は、半構成的面接で行った。面接では、保育所の子どもとはどのような関わりをしているか、関わっている時にどのように感じるか、子どもと関わることが自身にとってどのような意味があると思うかという質問項目を設定した。

面接場所は、本人の居室や施設内のプライバシーが

守られる部屋で行った。面接はデータの補足・確認のため可能な限り2回実施した。所要時間は1回30～80分であった。承諾を得て面接内容を録音した。データ収集期間は、2013年4月～2013年9月であった。

4. 分析方法

逐語録の内容から、高齢者が子どもとの交流をどのように感じ捉えているのかについて表している部分を取り出した。取り出したデータの大きさは、意味内容が理解できる程度の長さとした。抽出した部分について可能な限り対象者の言葉を用いてコード化し、コードの類似性や相違性を検討しながら、カテゴリー化する作業を繰り返し、カテゴリーを形成した。

5. 真実性の確保

データおよび分析結果の真実性を保つため、対象者に可能な限り面接時に語られた子どもとの交流の意味に関する表現の確認を行い、訂正や補足を受けた。また、老年看護の実践者や研究者とともに継続的に検討を行った。

6. 倫理的配慮

本研究は、島根大学医学部看護研究倫理委員会の承認を得て実施した。施設管理者から紹介を受けた対象者に、研究目的および内容を示し、研究協力は自由意思であり、研究協力を拒否しても今後の施設利用へはいっさい影響を与えないこと、途中辞退が可能なことを保証した。逐語録等の研究データは、鍵つきの場所で保管し、個人が特定されないようなかたちで表記し、本研究以外に使用しないこと、学会等で研究結果を公表することについて口頭と文書で説明した。対象者の同意書への署名により研究協力の同意を得た。

IV. 結 果

1. 対象者の概要 (表1)

対象者は男性3名、女性7名の10名であり、要介護度は全員非該当(自立)であった。平均年齢は 80.0 ± 8.4 歳、平均入所年数は 5.6 ± 4.2 年であった。面接回数は9名が2回、1名が1回であり、一人当たりの平均面接時間は47分であった。

2. 複合施設に入居する高齢者における子どもとの交流の意味 (表2)

複合施設に入居する高齢者の子どもとの交流の意味として、4つのカテゴリーと、12のサブカテゴリーが抽出された。

以下、カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを< >で表す。カテゴリーがデータに基づいた結果であることを示すために、代表的な対象者の言葉を記載した。なお、対象者の言葉は「 / 」内に、対象者は「 [] 」内のアルファベットで表記する。また、前後の文脈で理解しにくい箇所は()内に言葉を補って示した。

1) 心地よい居場所

施設で生活する高齢者にとって、子どもとの交流は、<家族から離れ施設で暮らしている現実から解放される><小さい頃の我が子や孫と関わっているような気持ちになる>機会であると同時に、これまで地域生活で経験してきた昔ながらの助け合い・支え合う<お互い様の関係性>の得られる場であり、<子どもの純粋さや無邪気さに心が休まる>【心地よい居場所】となっていた。

(1) <家族から離れ施設で暮らしている現実から解放される>

様々な理由で家族と離れケアハウスで暮らしている

表1 対象者の概要

対象者	性別	年齢	入居年数	面接回数
A	男性	70代前半	5年1ヶ月	2
B	男性	70代後半	1年11ヶ月	2
C	男性	80代後半	12年10ヶ月	2
D	女性	60代後半	2年4ヶ月	2
E	女性	70代後半	5年3ヶ月	1
F	女性	70代後半	9年6ヶ月	2
G	女性	80代前半	4年8ヶ月	2
H	女性	80代後半	2年2ヶ月	2
I	女性	80代後半	1年0ヶ月	2
J	女性	90代後半	11年2ヶ月	2

高齢者にとって、子どもとの交流は気を紛らわせ現実から解放される機会となっていた。

「やっぱり自分の子は近くにおらんとねって思うけど、まあ、それも仕方のないことで、向こう（遠方）で就職して、向こうで結婚してるから、なかなかそういうことも言えんから。そうしたら、ここに一日中365日おってもね、ちょっと変な気持ちになりますけんね、やっぱり、（子どもとの交流は）刺激があっ
ていいじゃないですかね」[F]

「私の子もいっぱいおりますけど、子どもがおってもね、まあ、縁がないというか、考えらんようにしとります。（子どもとの交流は）もう、その時、その時、にぎやかで、大騒ぎですけん。気が紛れていいです。ほんとに一日がすぐ終わりますけん」[G]

(2) <小さい頃の我が子や孫と関わっているような気持ちになる>

自分の子どもが小さい頃や今は離れて暮らしている孫と重ねて、自分の子や孫と関わっているような気持ちになっていた。

「おばあちゃん、おばあちゃん言っ
てねー、声かけて、子どもも言っ
てくれるとねー。小さい時から孫を抱
いて育てたことがないですよ、8人も
おりますけんね。だから、まあ余計に
可愛いとかねえ。あんな気がするん
ですよ。もし、自分がいたら、こん
な風に（孫を）可愛がってやったの
にーとかねえ」[D]
「（自分の）子どものことが頭にある
じゃない、そういう状態で子どもに
会うと、かわいいよ」[A]

(3) <お互い様の関係性>

高齢者は子どもとの関係性を、自分が子どもたちに教える（与える）という一方通行的な関係性ではなく、自分も子どもから教えてもらう（与えてもらう）ことで互いに刺激を与え合うお互い様の関係性だと感じていた。

「今頃の子どもさんは年寄りと一緒に暮らさんけん、人と人の付き合いが、だんだん分からんやになると思いますね。隔離されて、子どもは子どもばかり、若いもんは若いもんばかり、交わりが少なくなっ
たなあって思いますよ。我々の年代は、嫌な思いもしましたけど、勉強になったこともありますけんねえ。お互いにね。年寄りも子どもの話聞いたり、今頃はこんな遊びが流行ってるなあって思って、興味がわくほどでもないと思いますけんね」[J]

「（最近のキャラクターは）珍しいもんだわ。だけん、今の子どももの（キャラクターの話）を聞いて、その反面、今度はお団子作るようになると、向こう（子ども）が分からんわね。団子作りでは『もっ

と水いれーだわね。いっぺんに入れたらじゃぼじゃぼになってしまーわね』ってこないだも言ったりね（大きな声で笑われる）」[H]

(4) <子どもの純粋さや無邪気さに心が休まる>

施設入所により、施設で働いている職員等の固定された大人と関わる機会がほとんどである高齢者にとって、無邪気で純粋な子どもとの交流は、大人との関わりとは異なり、気楽で癒されるものであった。

「よその子どもさんでもねえ、無邪気なことですねえ、可愛いですわ。子どもたちが遊んどるのを見
ただけでも、楽しいですけんね。安らかになります」[I]

「子どもは邪心がないからねえ、何でも素直に聞いてくれるし、まあ、ここで年寄りの友達がいても、年取って割とひねくれた人が多いから、（苦笑いされながら）やっぱりねえ、こういうところに入居される人は家庭がなんかねえ、いろいろとあつたり、そんな人が多いですわね。だけん、子どものようにはい
かん。子どもはねえ、なんにも悪いこと考えとらんもんねえ」[H]

2) 生きる力の高まり

家族や住み慣れた土地を離れ、施設で独り生活をしている高齢者は、子どもと交流を通して<子どもらしい言動に心が弾む>ことで気持ちが明るくなり、<意欲が湧く>ことで活力が高まり、【生きる力の高まり】に繋がっていた。

(1) <子どもらしい言動に心が弾む>

施設入所により、単調で刺激の少ない暮らしをしている高齢者は、子どもと交流することによって、子どもらしい言動に感情が揺さぶられ、心が弾み、気持ちが明るくなっていた。

「こないだも、『僕は大きくなったらこの人と結婚する』だことの、ほんにあんなことを真剣には考えてないんだろうけど、そんなことを言うのが面白かったですよ」[D]

「（子どもたちと）お話したり、話したほどでも健康になりますけんね。可愛いですけんねえ、ひらひらとしたスカート履いたりねえ。まあ、『おばあちゃん、おばあちゃん』って小鳥がさえずるような。手つないだりなんかして、『まあ、握手だねー』っていうと大笑いして、遊んで、嬉しいし」[G]

(2) <意欲が湧く>

独り施設で生活している高齢者にとって、はつらつとした子どもたちと交流することは、心が弾むだけではなく、もっと生きようという気持ちや、なにかをしようという意欲を湧かせていた。

「子どもとのいろんな触れ合いを通して、幼児の気持ちを、いろいろなことで見させてもらったり、聞かせてもらって、自分ももっと生きらないけんわ、強く生きらないけんわって思うです。子どもたちと一緒にこういう風なこと（交流）もあるんだからって思って、やっぱり弾みが出てくるですよねぇ、自分自身でもねぇ」[I]

「(子どもたちとの交流は)嬉しい、楽しいし、ウキウキした気持ちになるというか、刺激をもらうようなこともありますしね、小さい子のパワーをもらったりもすると思うんですけどね。(中略)運動会や、誕生会の時には、ちょっといい服にして化粧して行こうって。化粧するだけでも、改まった気持ちにまたなりますよ」[D]

3) 自尊心の向上

高齢者は、＜自分の健康に自信をもてる＞＜年長者としての役割を果たす＞＜経験を踏まえ活躍できる＞ことで【自尊心の向上】に繋がっていた。

(1) ＜自分の健康に自信をもてる＞

ケアハウスで生活している他の高齢者と比較し、子どもたちと関わることでできる自分の健康状態に自信を持つことが出来ていた。

「私たちこそ、保育園に行きますけどね、(ケアハウスに)入っとっても、歩けない、出られない人がいっぱい長生きしとられますけんね、私たちはまだ健康体なもんで、まだ出歩かれる」[J]

「ほんとに私なんかはおかげで、足腰がいいから、そういうところでも参加できますからねぇ。私はすごく嬉しく思ってるんですよ。行きたくても行けない、誕生会でも1時間半ぐらい座って見るとか、そういうことができない方がたくさんいらっしゃいますからね、だから、私なんかは幸せだと思いますよ」[D]

(2) ＜年長者としての役割を果たす＞

自分が子どもの頃に、祖父母や近隣の高齢者にしてもらったことを自分の役目として今の子どもに返していた。

「保母さんやら先生もいるけれども、まあ、老いたような人間が、我々が言っ、どうじゃこうじゃいうのがいいじゃろうと思って、できるだけそういう風な機会に入っとるけどねぇ」[C]

「私らが子どもの頃にこういう風にやってもらったから、それを返す、それだけだよ。(中略)昔はね、自分の親じゃなくても、他人の親でも怒ってくれたもん。今はそれがないもん」[A]

(3) ＜経験を踏まえ活躍できる＞

これまでの人生経験を活かして、子どもたちに様々

なことを教えることで、活躍できる機会になっていた。

「笹巻き作りがありまして、私らは昔親から教えてもらったり、嫁いでお嫁に行くと姑さんがそういうふうにごさせられますから、笹巻き作りも何年も経験したものでございますからね、ここの食堂でさせられましたから、子どもと一緒にですよ。笹をこうして合わせて巻くということが、なかなかならん(上手にできない)もんですからね、子どもと一緒に試食会もさせていただいたんですけど、楽しかったですよ」[I]

4) 人生を顧みる

子どもとの交流を通して、＜自己の歴史を振り返る＞＜自分が歩んできた時代の変化を感じる＞ことで、【人生を顧みる】ことに繋がっていた。

(1) ＜自己の歴史を振り返る＞

子どもとの交流により、楽しかった自分の子どもの頃のことを思い出し、懐かしく感じたり、自己の行いを反省したりすることで、自分の歴史を振り返っていた。

「幼児の気持ちを、いろいろなことで見させてもらったり、聞かせてもらって、やっぱり自分たちも、自分らの小さいときこんな感じだったかいなあって思ったりして、それによって、いろんなことを反省したりして」[I]

「(子どもたちと交流していると)元気があっていいなあ、自分もこんな時代があったなあって(懐かしく感じる)」[A]

(2) ＜自分が歩んできた時代の変化を感じる＞

子どもたちと関わることによって、今の時代を感じ、自分の子ども時代と比較をして、自分がこれまで歩んできた時の流れを感じていた。

「今頃の子どもは進んでるからねえ。浦島太郎で、煙が出ておじさんになったって言ったって、『なんでえ?』ぐらいのことじゃないだろうか。我々が子どもの頃は、『おおっ』と思って聞いたような気がするけどね」[H]

「わしらの子どもの時と今じゃ全然違うし、だけん、わしらが子どもの時と今の子どもの時じゃ、やっぱりどうかなあ。昔の我々の時代の方が、なんか遠慮しとるような気がするわ。今の子どもは割合ね、はっきり言うたり、したりするけんねえ」[C]

表2 複合施設に入居する高齢者における子どもとの交流の意味

カテゴリー	サブカテゴリー	コード (一部抜粋)
心地よい居場所	家族から離れ施設で暮らしている現実から解放される	<ul style="list-style-type: none"> 子どもと交流している間はいろいろなことを忘れて過ごせる。 自分の子どもとは縁がないと思って、考えないように過ごしている中で、子どもとの交流は賑やかで、気が紛れる。
	小さい頃の我が子や孫と関わっているような気持ちになる	<ul style="list-style-type: none"> 孫と一緒に過ごしていたら、こんな風に可愛がるのにも思いながら、子どもと関わっている。 自分の子どものことが頭にあるため（関わっている子どもと自分の子が重なって見えて）可愛いと感じる。
	お互い様の関係性	<ul style="list-style-type: none"> 子どもと年寄りが交流すると、子どもは人の付き合い方が、年寄りは今頃の遊びが分かり、お互いに勉強になる。 最近の話は子どもに教えてもらい、団子作りなど昔ながらのものは子どもに教えている。
	子どもの純粋さや無邪気さに心が休まる	<ul style="list-style-type: none"> よその子どもでも、無邪気に遊んでいる姿を見ているだけで楽しく、安らかな気持ちになる。 入居している高齢者とは異なり、子どもは素直に話ができる。
生きる力の高まり	子どもらしい言動に心が弾む	<ul style="list-style-type: none"> 子どもらしい言動が面白い。 子どもらしいひらひらした服や小鳥がさえずるような話し方の子どもと話ただけでも健康になる。
	意欲が湧く	<ul style="list-style-type: none"> 子どもと交流すると、もっと強く生きないといけないと弾みがでる。 化粧をしたり、身なりを整えようという気持ちになる。
自尊心の向上	自分の健康に自信をもてる	<ul style="list-style-type: none"> 子どもとの交流会に出られない人がいる中で、自分は健康だから子どもと交流できる。 子どもとの交流会に行きたくても行けない人がいるので、子どもとの交流会に出れる自分は幸せだと思う。
	年長者としての役割を果たす	<ul style="list-style-type: none"> 年長者が伝えた方がよいと思うことは、できるだけ伝えている。 自分が子どもの頃に他人の大人にしてもらったことを今の子どもの返す。
	経験を踏まえ活躍できる	<ul style="list-style-type: none"> 寮母さんに頼まれて、笹巻きの作り方を子どもに教えてあげている。 何年も経験してきたことを子どもに教えてあげる。
人生を顧みる	自己の歴史を振り返る	<ul style="list-style-type: none"> 子どもと関わると、自分の小さい時はこんな感じだったかなって思ったり、反省したりする。 自分もこういう時があったなと思い出す。
	自分が歩んできた時代の変化を感じる	<ul style="list-style-type: none"> 昔と今では感じ方と反応が違うと感じる。 自分が子どもの頃は遠慮していたが、今の子どもは割合はっきり言ったり、したりして、今と昔では全然違うと感じる。

V. 考 察

1. 複合施設における高齢者にとっての子どもと交流する意味

本研究で見出された【心地よい居場所】、【生きる力の高まり】、【自尊心の向上】は、先行研究⁷⁻¹¹⁾で示された子どもとの交流効果と類似する結果であった。【心地よい居場所】は、子どもとの交流自体が＜子どもの純粋さや無邪気さに心が休まる＞＜小さい頃の我が子や孫と関わっているというような気持ちになる＞ことで癒しの意味をもつことが伺えた。施設に入所している高齢者は、住み慣れた家で家族と生活する環境とは異なり、初めての場で、見知らぬ他者との関係を作りながら生活している。施設で暮らす高齢者にとって、＜小さい頃の我が子や孫と関わっているというような気持ちになる＞という家族と接しているような貴重な体験になっていると同時に＜家族から離れ施設で暮らしている現実から解放される＞という機会になっていると考えられる。また、＜お互い様の関係性＞は、先行研究¹⁰⁾で報告された、施設から与えられる生活の中で自身が子どもたちに与えることで自尊心が高まるという意味だけではなく、高齢者が子どもたちに与えつつ、与えてもらうという関係性であった。複合施設は、日常での交流もできることで子どもとの関係が持ちやすく、継続した関係を維持できるため、この関係性は、複合施設において高齢者が日常的に子どもたちに関わり、顔なじみの関係になっているからこそ築けるものと考えられる。複合施設での生活が、家族が互いに支え合いながら生活する普通の家庭と同じような環境となっているため、子どもとの交流は、家族や住み慣れた土地を離れ施設で生活する高齢者にとって【心地よい居場所】になっていると考える。

老年期になると、心身の健康の喪失や、経済的基盤の喪失、社会的つながりの喪失、生きる目的の喪失を遅かれ早かれ経験すると言われている¹²⁾。高齢者にとって、子どもとの交流は、そのような喪失体験をするなかで新たに獲得した社会的な繋がりであり、生きる目的や心身の健康を維持向上させるものと言える。子どもを教育する役割を再獲得したとも言える。そして、刺激の少ない施設での暮らしの中での刺激となっている。これらのことから、【生きる力の高まり】と【自尊心の向上】がもたらされていると考える。

本研究では、先行研究で示されていない【人生を顧みる】が見出された。【人生を顧みる】は、家族と離れ施設で生活する中で、子どもとの交流が、楽しかった自分の子どもの頃や、自分が子どもを育てた頃のこと

を思い出すきっかけとなっており、＜自己の歴史を振り返る＞機会となっていた。また、子どもたちと関わることによって、今の時代を感じ、自分の子ども時代と比較を行うことで＜自分が歩んできた時代の変化を感じる＞という意味をもっていた。複合施設において、子どもとの交流が日常的に繰り返され、＜自己の歴史を振り返る＞＜自分が歩んできた時代の変化を感じる＞ことによって、自己の人生の受け入れにつながっていると考えられる。

E.H. エリクソン¹³⁾による老年期の発達課題は統合である。老年期は、人間の生涯を完結する重要な時期であり、今までの自分の人生を総合的に評価し直すという営みを通して、自分の人生を受け入れていく。統合を獲得することができれば、心理面の安定が得られ、人間的な円熟が達成される。高齢者にとって子どもとの交流を日常的に行うことは、【心地よい居場所】の中で、【生きる力の高まり】と【自尊心の向上】がもたらされ、【人生を顧みる】ことであり、人生の受け入れ、統合を促進する要素になると考える。また、【心地よい居場所】のもとで過去を想起することは、心地よい記憶を思い出すだけでなく、辛い過去の出来事の中に肯定的な意味を発見したり¹⁴⁾、思い出した内容を肯定的に再評価することを可能にする¹⁵⁾と言われている。このことから、子どもとの交流は【心地よい居場所】であることが基盤となり、統合の促進をはかるのではないかと考えられる。

2. 子どもとの交流を活かした高齢者支援のあり方

本研究で得られた結果を複合施設に限らず高齢者と子どもとの交流を活かすためには、高齢者と子どもが顔なじみの関係となれるような同じメンバーによる継続的な交流が必要であると考えられる。そして、高齢者が子どもに教えるだけでなく、家庭内で孫と祖父母が交流するように子どもから教えてもらうような関係が構築できることが必要であろう。さらに、高齢者が長い人生の中で獲得し備えている様々なスキルを強みとし、その強みが活かされる場を設けたプログラムの作成が必要であると考えられる。

また、ケア提供者が高齢者にとっての子どもとの交流の意味を理解したうえで関わることは、高齢者がその人らしく生活を行うための支援において重要である。そして、子どもとの交流を通して促進されるであろう高齢者の統合は、高齢者自身の子どもの交流の意味づけによってより促されると考えられる。語りによって自己回顧が促される¹⁶⁾ことから、高齢者自身の子どもの交流の意味づけは、それを他者に語るなどの

振り返りを通してより強化されると考えられる。したがって、高齢者の発達を支援するためには、高齢者が子どもとの交流をどのように感じ、捉えているのかについてスタッフなどの他者に語る機会をもつことも重要ではないかと考える。

VI. 研究の限界と今後の課題

本研究の対象者は、隣接する保育所に通う子どもとの交流に自らの意思で参加されている方であり、子どもとの交流に肯定的な意味を見出している方が多かったため、積極的に参加していない高齢者の声は反映されていない。また、本研究は1施設での調査であり、全員が日常生活において自立した人であったため、子どもとの交流形態、子どもの年齢、対象高齢者の要介護度などの条件が異なれば、交流の意味は異なる可能性がある。

本研究では、複合施設の高齢者に焦点をあて、高齢者にとっての子どもとの交流の意味を見出したが、今後は、子どもにとっての高齢者との交流の意味を含めて、高齢者と子どもとの交流の意味を総合的に検討していく必要があると考える。

VII. 結 語

複合施設に入居する高齢者の子どもとの交流の意味として、4つのカテゴリーと、12のサブカテゴリーが抽出された。【心地よい居場所】は、＜家族から離れ施設で暮らしている現実から解放される＞＜小さい頃の我が子や孫と関わっているような気持ちになる＞＜お互い様の関係性＞＜子どもの純粋さや無邪気さに心が休まる＞のサブカテゴリーで構成された。【生きる力の高まり】は、＜子どもらしい言動に心が弾む＞＜意欲が湧く＞から構成された。【自尊心の向上】は、＜自分の健康に自信を持てる＞＜年長者としての役割を果たす＞＜経験を踏まえ活躍できる＞のサブカテゴリーで構成された。また、【人生を顧みる】は、＜自己の歴史を振り返る＞＜自分が歩んできた時代の変化を感じる＞から構成された。

複合施設で暮らす高齢者にとって子どもとの交流は、そのものが【心地よい居場所】であり、その中で高齢者の【生きる力の高まり】や【自尊心の向上】がもたらされ、【人生を顧みる】ことが示された。このことから、高齢者にとって子どもとの日常的な交流の積み重ねは、老年期の発達課題である統合を促進する要因であることが示唆された。

謝 辞

快く面接に応じてくださった対象者の皆さま、研究にご協力いただきました施設職員の皆さまに深く感謝いたします。

なお、本研究は、島根大学大学院医学系研究科に提出した修士論文の一部に加筆および修正を行ったものである。

文 献

- 1) 内閣府：平成27年版高齢社会白書，2015/7/23，
<http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2015/gaiyou/pdf/1s1s.pdf>.
- 2) 正木治恵，山本信子：高齢者の健康を捉える文化的視点に関する文献検討，日本老年看護学会誌，13(1)，95-104，2008.
- 3) 草野篤子：インタージェネレーションの歴史，現代のエスプリ 444-インタージェネレーション-コミュニティを育てる世代間交流（草野篤子，秋山博介編），33-41，至文堂，東京，2004.
- 4) 内閣府：高齢社会対策大綱，2012/12/10，
<http://www8.cao.go.jp/kourei/measure/taikou/index-t.html>.
- 5) 金森由華：高齢者と子どもの世代間交流-交流内容を中心に-，愛知淑徳大学論集福祉貢献学部篇，2，69-77，2012.
- 6) 糸井和佳，亀井智子，田高悦子 他：地域における高齢者と子どもの世代間交流プログラムに関する効果的な介入と効果：文献レビュー，日本地域看護学会誌，15 (1)，33-44，2012.
- 7) 亀井智子，糸井和佳，梶井文子 他：都市部多世代交流型デイプログラム参加者の12か月間の効果に関する縦断的検証：Mixed methods による高齢者の心の健康と世代間交流の変化に焦点を当てて，日本老年看護学会誌，14 (1)，16-24，2010.
- 8) 藤原佳典，西 真理子，渡辺直紀 他：都市部高齢者による世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム“RE-PRINTS”の一年間の歩みと短期的効果，日本公衆衛生雑誌，53 (9)，702-714，2006.
- 9) 土井晶子，前徳明子：高齢者施設におけるレクリエーション活動の一環として的高齢者と子どもの世代間交流の効果とその可能性についての考察，小池学園研究紀要，3，25-42，2009.
- 10) 立松麻衣子：高齢者の役割作りとインタージェネレーションケアを行うための施設側の方策：高齢者と地域の相互関係の構築に関する研究，日本家政学

- 会誌, 59 (7), 503-515, 2008.
- 11) 上村眞生, 岡花祈一郎, 若林紀乃: 世代間交流が幼児・高齢者に及ぼす影響に関する実証的研究, 幼年教育研究年報, 29, 65-71, 2007.
- 12) 橋本有理子: 老年期における家族的役割, 社会的役割と精神的健康との関連性に関する研究, 関西福祉科学大学紀要, 9, 117-130, 2006.
- 13) Erikson, EH, Erikson, JM: ライフサイクル その完結増補版 (村瀬孝雄, 近藤邦夫訳), 79-86, みすず書房, 東京, 2001.
- 14) Carson, TP, Adams, HE: Activity values as a function of mood change, *Journal of Abnormal Psychology*, 24, 189-205, 1980.
- 15) Batcho, KI: Nostalgia: A psychological perspective, *Perceptual and Motor Skills*, 80, 131-143, 1995.
- 16) 阪本陽子: 高齢期の社会化における「語り」の意義, 教育研究所紀要, 14, 73-78, 2005.

(受理 2015年12月22日)